

スディルマン将軍像献花式

令和2年8月17日

葛城奈海（スディルマン将軍像献花式実行委員長）

みなさん、今日は猛暑の中、また武漢ウィルス禍の中にもかかわらず、ご参集頂きまして、ありがとうございます。

お陰様で、本日、トリ・プルナジャヤ(Tri Purnajaya)駐日インドネシア公使、渡辺幸一防衛政務、ご臨席のもと、このように粛々と献花式を行えましたこと、心から有難く思っております。お忙しい中、駆け付けてくださいました、山田宏議員、杉田水脈議員にも御礼を申し上げます。

さて、昨年まで、本献花式の司会を務めていた私ですが、本年より、このようにして実行委員会の代表を務めさせて頂くことになりました。ここで少し、私の思いをお話しさせて頂こうと思います。

まず、防衛省自衛隊との関わりですが、戦後教育を受け、私は長く「アンチ自衛隊」でした。しかし、ライフワークにしている自然環境問題とのかかわりや、大学時代から始めた武道の影響で、20代も後半に入ってから、遅まきながら国の守りの大切さに目覚め、かつての自分のような存在と自衛隊との懸け橋になりたいと思うようになりました。そうして、はじめて防衛省自衛隊とかわったのが、今、目の前にある、市ヶ谷記念館を中心に平日毎日行われている市ヶ谷台ツアーの案内人として、でした。平成13年から3年間、ガイド役を務めました。

ガイドを務めるようになってしばらくしてから、公募の予備自衛官制度・予備自衛官補の制度が始まることを知り、その1期生になり、横須賀の武山駐屯地で3年かけて50日間の訓練を終えました。平成16年に予備自衛官に任官して、今年で16年になります。5年ほど前からは、「国民と自衛隊の懸け橋になろう」という主旨のもとに発足していた「防人と歩む会」の会長も務めさせて頂いております。

次に、インドネシアとの関わりですが、3年前にインドネシアでも最貧地域であるマドゥラ島などに「緑の募金事業」の評価委員として視察に訪れました。その際、本日も参列して下さっている公益財団法人オイスカさんにお世話になったわけですが、希望して、カリバタ英雄墓地とPETA・郷土防衛義勇軍の博物館を訪れました。そこで本日花を捧げさせて頂いたスディルマン将軍の功績を知る中で、ひとつの新聞記事が目にとまりました。

た。ステイルマン将軍像がインドネシア国防省から日本に送られ、防衛省の敷地内に展示されているというのです。そんな話はずいぞ知らなかったもので、大変驚きました。

その後、明らかになったことによると、なんでも当初はメモリアルゾーンに展示されていたものが、PAC3の配備によって邪魔になり、一度倉庫に入ってしまったとか。それを民間（つまりここにおられる加瀬先生たちのことですが）からの強い要望により、場所をここ市ヶ谷記念館の隣に変えて再び日の目を見るようになったとのこと。

インドネシアでその新聞記事を目にした翌年の平成30年から、私はこの献花式に関わらせて頂くようになりました。初めて、この像を目にしたときのインパクトは忘れられません。戦後の日本人を骨抜きにする、自虐史観のもとになった東京裁判が行われた大講堂のある記念館を、ステイルマン将軍像はまるで睨みつけるように立っている、と感じました。

時は、少し遡りますが、自虐史観にどっぷりついていた私の目を覚ますひとつのきっかけになったのが、平成13年に公開された『ムルデカ17805（いちななはちれいご）』という映画でした。実は、ここにおられる加瀬英明先生がつくられた映画だと知るのは、ずっと後の話になりますが、ムルデカは、インドネシア語で独立を、17805は、初代インドネシア大統領スカルノによって独立宣言が行われた皇紀2605年8月17日の数字を日月年の下2桁の順に並べたものです。それまで私は、日本軍というのはアジアの人々にひどいことをしたとばかり思っていたのが、なんと2000人もの日本兵が戦後もインドネシアから帰国せず、350年に及ぶオランダ植民地支配からの独立を勝ち取るべくインドネシア人と共に血を流し続けたことを知って、心を揺さぶられ、自国の歴史にはじめて誇りを持つことができました。

だからこそ、こうした多くの日本人や、日本軍によって育てられたステイルマン将軍（Sudirman）をはじめとする郷土防衛義勇軍の存在や、こうした史実を知ってもらいたいと思います。当初、このステイルマン将軍像は、市ヶ谷記念館のこんなすぐ脇にありながら、市ヶ谷台ツアーのコースに入っていませんでした。それを大変残念に思い、産経新聞の連載コラム『直球&曲球』等に「市ヶ谷台ツアーのコースにステイルマン将軍像を！」と書かせて頂くとともに、当時政務官であられた山田宏参議院議員になんとかこの像をコースに入れてくださいとお願いしたところ、山田政務官をはじめとする関係者のみなさんのお力のお陰で、今ではツアー参加者にこの像も見て頂くことができるようになっていきます。（さらに言えば、私は、日本の歴史にとって大きな大きな転換点となった東京裁判の行われたこの記念館を、ツアー参加者だけでなく、より多くの国民に見てもらえるように、防衛省の敷地外にして、土日でも直接入館できるようにしていきたいと思っています

す。その話をはじめると長くなりますので、今日は控えますが)

いずれにせよ、私は、ここに立つといつもスティルマン将軍に叱咤されているような気がしてなりません。「日本人よ、いつまで東京裁判の呪縛にとらわれ続けるのか。日本人よ、ムルデカを！」と。

本日参列されたみなさんには、ぜひ、先人たちの血によって結ばれたインドネシアと日本の深い絆を知って頂くとともに、戦後 75 年経っても、未だに GHQ による WGIP (日本人に戦争についての罪悪感を植え付けるための宣伝計画) から目覚めることができない日本を、真の意味でムルデカ、自立国として再生していこう！という意識を共有して頂ければ大変ありがたく思います。

本日は、誠にありがとうございました。